Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

122

森　の　通　信　　2016. 10. 11

2016年９月「Tapajosダム建設キャンセル」と決定し、「世界３位Belo Monteダム建設延期」と勝利宣言するアマゾン・インディオの若者達。世界的な勝利とダム汚職に絡むルセフ大統領解任。(Photo/Amazon Watch)

エコツアー特集号

CONTENTS

・People(41)火災と闘ったバスキたち・・・・・p3
・近藤さんの現地報告・・・・・・・・・・・・・・・p4～p6
・エコツアーの流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・p7～p8
・今年のエコツアー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p9
・エコツアーに参加して・・・・・・・・・・・・p10～p15
・クラウドファンディングのご報告・・・・・・・・・・p16
・アブラヤシ企業の動き2・・・・・・・・・・p17～p20
・パーム油学習会第5弾の報告・・・・・・・・・・・p21
・世界の森林ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p22
・会員から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p23

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
2016. 10. 11
122

今年の夏の異常な暑さ、とんでもない台風の動きなど、多くのかたがたが地球の温暖化の深刻さを実感されたのではないかと思う。しかし、もし、地球温暖化に対する多くの人たちのいろいろな取り組みがなかったら、今より夏はもっと暑く、異常な気象により多くのかたがたがより深刻な被害を受けていただろうということをも、想像する必要があると思う。インドネシアのカリマンタンで森林火災の消火活動に携わったバスキたちＦＮＰＦのメンバー達の活躍もその一つである。昨年のインドネシアでの森林火災だけで、日本の１年間の排出量を上回るほどの二酸化炭素が排出されたと考えられている。森林が燃えただけでなく、ボルネオ島の湿地帯であった森林の土壌に広くかつ深く分布する泥炭に火が燃え移ったのだ。この非常に困難な消火活動に立ち向かったのが彼らたちであった。おそらく、日本中でただ一人この消火活動を体験した西岡さんの話によると、激しい煙と足下までの大変な熱さの中での地道な消火活動は、1 日だけでも体調に大変なダメージ受けたという。命がけの連日の消火活動で、ろくな食事もとれずにがんばる彼らを私たちは日本で心配しているしかできなかった。（ｐ３参照）もし、彼らの消火活動がなければ、さらに大量の温室効果ガスが排出され、地球温暖化はさらにすすみ、ボルネオ島に住む多くの住民や野生生物たちはより深刻な状況に陥っていたことは間違いない。

昨年の森林火災の教訓から、取り締まりが強化され、現地では雨も降り昨年のような大規模森林火災が発生する兆候はいまのところない。また、インドネシアでは泥炭復興庁が発足し、環境ＮＧＯなどとの協力や北海道大学や京都大学との協力もすすめられるということで、取り組みがすすむことが期待される。（近藤美沙子さんの報告では、さほど期待できないかもしれないが・・・）

また、はじめてのクラウドファンディングにも、今までになく、たくさんのかたがたからの協力をいただき、大変心強い。今年のエコツアーにも、若者たちも参加してくれた。ボルネオ島の森林を守り、野生生物たちを守り、住民たちの暮らしを守るための活動に対する支援は、日本にもとても関わりの深い問題であり、長く続けていく必要がある。今後とも皆様のご協力をお願いしたい。（米澤）

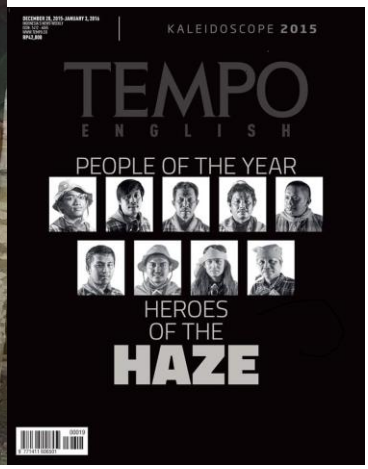
【ウータン活動記録】

2016・6・14－7・20 インドネシア火災支援「クラウド・ファンディング/ボルネオの火災を現地 NGO と協力して止める」寄付をネットで実施。

6･18	関西の『スタデイツアー』合同説明会＊参加/西岡、武田
6･24－25	近畿の環境団体情報交流会＊参加/石崎、加納
7･2	マイチケットの旅行危機管理セミナー＊参加/石崎、西岡、近藤美
7･9	『パーム油学習会・アブラヤシ企業は変わるのか』講師：神前進一（元阪大教官）
7･14	JICA 関西の交流会・助成金会議に参加＊西岡
7･15	『パーム油研究会・見えない油』学習会に参加＊石崎、武田
8･2－11 月	スタッフ近藤美、タンジュン・プティン公園へ。「クラウド・ファンディング寄付の植林、通訳、調査等(ロセラ Tea 作成―タンジュン・プティンの柳原さん、ありがとう)
8･3	龍大生「主にボルネオの自然、生物多様性と私たちの暮らしの関係」講演：石崎
8･4	JICA 関西開発教育・国際教育セミナー「見えない油パーム油」講演＊石崎
8･8	コープこうべ「学びすと支援制度ウイズ」講演：石崎
8･25	「消費から持続可能な社会をつくる市民ネットワーク会議」参加＊石崎
8･26－9･2	ウータン第5回エコツアー、石崎、藤原、神前、近藤美
9・4	龍大エコツアー事後学習会＊石崎、藤原
9･11、9･13、9･17	「クラウド・ファンディング/寄付者に発送作業」

People㊶ 火災と闘ったバスキ、FNPF の仲間!

～笑顔は様々！それが生物多様性だ！～Heroes of the Haze（火災で闘ったヒーローたち/2015）



（FNPF 事務所での仲間と、2015 年 12 月に火災で闘うバスキを取り上げた『Tempo 誌』）写真・武田/西岡

風が強く吹く。鎮火出来ない泥炭湿地の森。8 月末にアブラヤシ企業の開発地から火災が拡大する。9 月 19 日、ジュルンブンの各地で火災は拡大していた。オランウータン保護センターのパウリヌス、私も鎮火作業に参加する。バスキが作業を指示しながらの消火作業。火を止めても、泥炭地の中から火が起きる。小型消火器で消しても消しても、わき起こる泥炭地の火事。「水がない。停止だ」とバスキ。6mの池を掘り、泥水をかけ続けるが水がない。10 月初めまでジュルンブン地区で続いた火災。

今度は 9 月末にトルク・プライ村周辺の火災が海風に煽られ、タンジュン・プティン国立公園の各地が燃えだした。10 月初旬にエコツアーで植林したパダン・スンビラン、ブグル地区も火災となる。

FNPF（Friends of the National Parks Foundation）の仲間たちは森で寝る。ある者は寝具もないから地面で寝た。食料も乏しい鎮火活動。そこに新団体・Care for Tanjung Puting も出来てガイド、ボランテイア、学生たち 300 名が「このタンジュン・プティンを守れ！」と消火活動に参加したのだ。

だが自治体、アブラヤシ企業は消火活動を殆ど手伝わなかった。何故だ！アブラヤシ企業開発地からの火災が大半だったから。昨年末から今年になり、いろいろ判明する。火災により日本より多い 16.5 億トンもの CO_2 が排出されたが、その 52%が泥炭湿地からだった。アブラヤシ企業の開発地、周辺からの火災が多い。今年、泥炭復興庁が立ち上げられ、ここに私達の友人でもある Wetlands Inter Indonesia Programm のニョマン氏も抜擢された。ジョコウイ大統領は「泥炭地での新規開発を全て認めない方向」と言う。ハッサン前林業相は新規開発しないとの政府案だったが、次々と容認した。この容認した地区のアブラヤシ企業の開発を法的に止められるのか・・・。止めねばならない！

今年はスマトラ北部とリアウで火災が起きているが、中、南、東カリマンタン等では殆ど火災がない。今のうちに是非とも消火道具や偵察道具を運んで、しっかりした消防チームと共に消防体制確立と「火災に強い森づくり」の再植林を支援し、作業に参加したい。　　（文責・Badman 西岡）

2016年8月　近藤美沙子

森で働く男たち

2016年8月上旬、FNPFの活動地のひとつであるラマンドゥ[1]での植樹に参加した。ここでは普段、2人のスタッフが担当者として植樹地の端に建てた作業小屋や近くの村に滞在して仕事をこなしている。今回は、私も含むボランティアとスタッフの7人で、2日間に1,500本の植樹をするという目標を持ってラマンドゥへと出かけた。

彼らを訪れて8回目にしてやっと、私はFNPFや彼らを取り巻くおっちゃんたちの「自然体（あるいはかなりそれに近い状態）」を見れた気がする。やっぱり、短期の訪問では見れない・分からないという判断は正しかった。例えば、ラマンドゥでの植樹初日の夕方、作業小屋から植林地への道のりで、ゴトゴトガタガタとエンジンの音を立てるトラクター[2]に乗り、そのハンドルを右へと左へと切るヘンドリ[3]を見ながら、考えたこと・・・。彼は、普段一人でこの場所に来て植林をすることが多いと言う。木が一本もない灼熱のラマンドゥの大地で、こんなに扱いにくい車両と一人で向き合い、一日数十本から数百本の木をもくもくと植えていくヘンドリ。近くの村にはバイクを飛ばして20分。一人のときは小屋にあるインスタント麺と卵だけで食事を済ませるという。携帯の電波も悪く、誰も喋り相手がいない環境。相手をしてくれるのは、ネコとテレビくらいだろうか。果たして今の若い世代のなかで、そんな作業を毎日続ける仕事をできる人がいるんやろうか？

ヘンドリのようなおっちゃん世代は、子どもの頃に自給自足を経験していて、自分が働き始める年齢の頃にはそれが回らなくなって[4]、違法伐採・鉱山・アブラヤシの苗木準備などの仕事を選び、それもやりにくくなったり性に合わなかったりして、森をつくることにエネルギーを注ぐことにした。この人たちは、「過酷な労働をいとわない」、「男のロマン的な何か誇り

---

[1] 中央カリマンタン州スカマラ群の南部に位置するラマンドゥ野生動物保護区の敷地内にあるものの、森林はまったくなく草原が広範囲に広がっている地域。クマイの事務所からはバイクで3〜5時間ほどかかる。

[2] 植林の苗を運ぶために、農業用トラクターの後ろに荷台をくっつけた車両で、人も乗ることができる。

[3] 3年前からFNPFで働き始めた40歳のおっちゃん。彼より以前に働き始めた20代のスタッフの義理の兄にあたる。FNPF入職前は、金の採掘などを主な仕事としていた。

[4] 現在の国立公園敷地内で暮らしていた人たちは、その生活圏からの立ち退きによって、農業という生活の基盤時に揺らぎが出た。それと同時に、木材や砂金を売ったりそれらを採るための道具を購入するシステム奥地まで伸びてきて、自給自足が中心の生活から貨幣経済中心の生活に段々とシフトしていったということが想像できる。おそらく、インフラや学歴優先の価値観が入ってきたことに伴って、子どもを学校に行かせるための諸費用（衣服類・文房具の購入や交通費など）が家計のプレッシャーになったことも考えられる。

に思えるものを欲している」ということを特徴として持っていると思う。例えば、バイクで道無き道を長距離移動して、道中バイクが故障したり自分や仲間が事故になりかけたり病気になったりしたことや、森の中で食料や燃料がなくなって困ったり耐えたりしたことなんかを、みんなの前でまるで勲章かのように自慢げに話をする。もちろん、苦労として顔のシワ一本一本にもなってるんやと思うけど。「過酷な状況を経験してきた俺[5]」というのは、違法伐採でも植林でも同じなんやろう。だから、一見真逆なことであっても、エネルギーの方向を変えて熱中することができる。エネルギーを注いで勲章になるものがあれば良いわけで、それが違法伐採であろうと植林であろうと、仲間たちに認められればいいというか。でも、根底には「森を壊してきた俺は、大きな借金を背負っている。だから今度は、森をつくることでその借金を返している」という気持ちも持っていたりする。

私と同い年やそれより若い世代は、自給自足をほとんど知らない。家でチリを育てることすらしていない家もある。そして、森を自分の手で切り開くことをしていない。アブラヤシ農園で働く子たちは、重機で開かれた後の土地で働いているだけだ。もちろん、小さい頃にはあった森がなくなったということは目撃していたとしても、その森は、親の世代が子どもだった頃よりも、すでにかなり小さくなっていたはずだ。そして、植える作業は人の手でするにしても、道路の整備に伴い、バイク・車・トラックでの移動や運搬に慣れている。また、学歴重視の価値観も高まっている。エディ[6]は、今はハドラン[7]の仕事を手伝っているけど、「進学したいけどお金がない」と言っている。FNPFオフィスによく遊びに来て植林や消火にも参加している20代の子も、ガイドをしているという点で、「フォレスター[8]」とは少し違うような気がする。

若い子は、父親世代がしてきた「屈強を耐えたり乗り越えたりする」ことがある程度はかっこいいと思いながらも、それに加えて英語ができることや、テクノロジーや学問にも長けているということも重要視しているように思う。そういったことは、父親世代の働き方をそのまま後をついて歩くというのとは違ってくる。例えば、「俺ら、木ぃ植えてるで！」と言いたい気持ちはあるけど、実際に父親の後をついて一本一本植える地味な作業を毎日繰り返せるやろう

---

[5] 「こういった苦労をしながら森林再生の仕事をしている自分」への称号のような感じで、彼らはしばしば自分たちのことを「フォレスター（Forester）」と呼ぶことがある。

[6] 後述のハドランの息子で、最近までは村を出て最寄りの町で高校に通っていたが、修了して実家に住んでいる。現在20歳。

[7] 2002年からFNPFで働いており、現役スタッフのなかでは古株の一人。普段はジョークをかまして満面の笑みで爆笑してくれるとてもフレンドリーなおっちゃんである一方、昔は違法伐採の仕事で労働者を取り仕切っていたり、村でも要人の一人になっていることから、怒らせたら怖そう・・・と私は内心思っている。

[8] FNPFスタッフ（特にバスキ）は、スタッフや周りの人に対して、「森で生活しながら森を守る活動をする人」といった意味合いでこの言葉を使う。主に、どんな環境でも耐えられる人間であることに重きを置いて使ってるような印象を受ける。脚注３も参照。

か？FNPFの基礎にあるのは、「ひたすら木を植えて森を再生する」ということのように感じるけど、それが出来る人材が、果たして若者世代から出てくるやろうか？でも、体力的に世代交代をしないといけない。引き継がないといけない。何を引き継いで、何は置いてきぼりになるか、何は方法を変えて同じ結果を生み出すことができるか？新しい世代が、どうしていきたいか決めるために考え動き始めないといけない気がする。

【上】ラマンドゥの作業小屋前で集合写真（右前が歯ドラン、左奥がエディ）
【右】ラマンドゥの植林地（地平線まで広がる草地）での作業を終えたヘンドリ

コラム：泥炭復興庁は海外支援の受け皿？

（以下、外国の大学で教鞭を取りながら、カリマンタンの森林や先住民などによる土地利用に関する活動に携わっている、ある研究者による見解。）

泥炭復興庁は設立の時点から、様々な点で失敗している。そもそも、設立の経緯を見ると、ノルウェーからの支援金・10億ドルの受け皿としてできたとしか考えられない。この支援金は、当初REDDプロジェクトで活用されることになっていたけど、それが見事にすべて結果を出せなかったことを受けて、支援金の行き場がなくなることを恐れたインドネシア政府が急に立ち上げたのが泥炭復興庁というわけだ。

泥炭復興庁の何が失敗か？1つ目は、生態系に関する問題をすべて「泥炭湿地」だけに集約してしまったこと。本来は様々な要素が複雑に絡まっているのに、「泥炭復興庁」という名前を掲げることで、関係者のエネルギーはすべて泥炭に注がれることになった。また、活動計画についてもめちゃくちゃで、2016年中に60万ha、2019年までに２百万haの泥炭湿地の地図化をする（深さも計測）と言っているが、もとになる情報が全くなく、白紙状態から始めるなんて不可能なことだ。

また、２つ目の懸念は、泥炭復興庁内部の人選と予算の使い方について。内部の人材でちゃんとしているのは2人だけで、あとはいったい誰がどう選んだのか不明だ。私たちの仲間内で彼らのことを知っている人がいない。そして、予算について。例えば、彼らのドローンは、政治界で危険視されているある要人が売りつけたもので、今後、多額の予算が彼のビジネスのために使われることが懸念される。

「ウータン・ボルネオエコツアーのこれまでを振り返って」

2016/09/26 石崎 雄一郎

ウータン･森と生活を考える会のボルネオエコツアーは2012年1月に開始しました。当時マイチケットで働いていた荒川共生さんの提案で、FNPF のバスキさんやタンジュンハラパン村のエコツーリズムグループのバナさんと相談し、実現しました。

エコツアーの目的の一つは、①「実際に日本からボルネオの現地を訪れ、環境破壊の現状や森林再生の活動を伝えること」。そして、僕たちがそれ以上に大事に考えていることは、②「遠い日本からやってきた仲間たちと森を守る活動を共に行うことで、現地の村人や NGO メンバーが自分たちの活動に誇りを持ってもらう」ことです。

エコツアー参加者に向けてのメッセージは、ウータンが重視する“現地の人と共に”“現地にあるもの”（種、苗、自然、工芸品）を使った活動を体験すること。特に一人が一家族に 4 泊のホームステイをすることは、他のスタディツアーでもあまり見られないこのツアーの醍醐味と言えます。言葉も通じない中で、コミュニケーションに試行錯誤しながらも、帰る頃には涙ながらにお別れを言う姿がしばしば見られました。

2012 年 1 月から 2016 年 8 月まで、これまで 6 回のエコツアーを行ってきて、中学生、高校生、大学生・院生、学校の先生、社会人、主婦、定年を迎えた方、NGO メンバー等幅広い参加者がありました。参加者が考えたワークショップ「ボルネオ／日本ボックス」では、米の収穫時に使っていた農機具や日本の女子高生グッズ等を入れて当てあい、盛り上がりました。子どもたちとの環境教育では共に手をつないで森の中を歩き、植樹を行う光景も見られました。昔からのウータンの会員からは、「改めてウータンの現在を行っている活動を実際に体験できて良かった」という声が聞かれました。4 人の高校生が参加した時には、日本の都会の生活とは全く違う生活を体験しながら、村の子どもたちとの交流を楽しみました。大学の先生やドキュメンタリー監督、国際理解教育の研究をしている学生など専門的な知識と個別の問題意識を持つ参加者が多い回もありました。最新のエコツアーでは、学生が多く参加し、スタディツアーらしい旅となりました。旅を通して、各々が成長していく姿が見られました。学生同士が助け合い、子どもたちとの環境教育では、即席で発表しました。学生の感想の中には「何もないように見える村だが、子育てや家族のふれあい、村人間のコミュニケーションが多い暮らしや子どもたちが工夫しながら遊んでいる中に、本当の意味での豊かさを感じた」という声が聞かれました。

☆エコツアーの主な内容

アブラヤシプランテーション（ジュルンブン）／オランウータン保護施設見学

ボルネオの熱帯林を蝕む広大なアブラヤシプランテーションを訪れて、アブラヤシやパーム油の特性、泥炭湿地や労働者の問題等を考えます。「実際に現場を見てみると環境破壊の実態がよりリアルに感じられた」という声が参加者から聞かれました。

隣接する FNPF のプロジェクト地では、プランテーションのような大規模な開発に頼らずに、村人の収入にもなるアグロフォレストリーや有機農業を見学します。

苗づくりグループとの植林（ブグル／パダンセンビラン）

タンジュンハラパン村では、かつて貧しかった村人たちが違法伐採に従事していましたが、村人の一部は現在 FNPF と共に原生種の苗作りと植林活動を行っています。彼ら苗作りグループと共に植林活動を行ったツアー参加者からは、「濡れや汚れをだ

んだん気にしなくなり、現地の方の大らかな心に近づけた気がしました」「たとえ数本でも苗木を植えることで、現地の植林がどのようなモノかをイメージすることができました」という声が聞かれました。

子どもたちとの環境教育（パサラ等）

タンジュンハラパン村の子どもたちと、森の中で遊びや学習、植林などを行います。「こちらからも何か伝えたい！」という参加者からの自発的な発表もありました。

ホームステイ／工芸品づくり／食事（タンジュンハラパン村）

タンジュンハラパン村で数泊のホームステイをしながら、水道もなく、電気も一部しか無い現地の村の暮らしを体験します。この村でエコツーリズムを普及させようとしてきた理由のひとつは、ボルネオの自然を楽しみに世界から訪れる世ツアー客に、村人が伝統工芸を教え、お土産を売ることで、副収入を得ることです。ツアー客は、村人と交流することで、他にはない経験を持ち帰ることができます。また、ボルネオで起こっている大規模な自然破壊を知ってもらうことにつながるかもしれません。

マングローブ植林（ウェットランド・インターナショナルのプロジェクト地）

場所をジャカルタに移して、湿地の保全を行う NGO ウェットランド・インターナショナル・インドネシアのプロジェクト地を訪れ、マングローブの植林を行います。渡り鳥の聖地となっているここバンタン・ベイ地区では、エビの養殖を伴う塩害等でマングローブが破壊されてきましたが、現在は住民が主体的にマングローブを再生しながら、天然の魚介類を採り、収入を得られる形を実践しています。

☆これまでのエコツアーを振り返って

これまで多くの方々のご参加、ご協力により、6 回のボルネオエコツアーを無事に開催できたことを感謝します。はたして、当初の目的は達せられたのでしょうか？

「現地の人たちに森を守る活動に誇りを持ってもらう」ことを第 1 の目的としていましたが、2012 年の半ばにアブラヤシ企業が村に入ってきて、多くの村人はパーム油産業への従事という森を守ることと逆行する道を選んでしまいました。「森を守ることの意義」を本当に現地の村人に理解してもらうことは叶わなかったと言えます。

家族を養うという現実の暮らしを目の前にして、理念的でもある「自然を守る」ことを訴えるのは、国内の自然を破壊し、環境破壊を海外にまで輸出し続けている日本から来た私たちがあまり言えることではありません。しかしながら、生命の根元である森がなくなることは遠くない将来に子どもの世代になって跳ね返ってくるでしょう。

とはいうものの、エコツアーを心待ちにする村人も多くいますし、交流の中でお互いが多くの‘気づき’を得ていることは、おそらく間違いの無いことかと思います。

日本からの参加者に環境破壊の現状や森林再生の活動を体験してもらうことについては、多くの参加者がプランテーションの現場に圧倒され、自然破壊がもたらす問題の深刻さを知り、森を再生することの意義と大変さを体験してもらえたかと思います。また、日本と違う生活環境で暮らす村人、暖かくフレンドリーな NGO メンバーとの交流により、「短い期間だったが、人生観を大きく変えられた」という声も聞かれました。

しかし、エコツアーの参加者が、その後のウータンの活動や森を守る活動に積極的に繋がっているかといえば、まだまだ課題は多くあり、今後は事前・事後学習やアフターフォローなどの工夫が必要だと感じています。今後も会員の方をはじめ、多くの方にエコツアーに参加し、現地で生の体験をしていただきたいと思います。

今回のエコツアーについて

藤原恒夫

少人数のエコツアーはその時の参加メンバーによって、その性格が変わることがあります。今回は龍谷大学のボランティアセンターから四名、大阪大学から院生一名と半数が学生でした。そのためか初日から全員が打ち解けた和やかな雰囲気で、ツアーは順調にスタートしました。今回、学生の結束力は強く、ツアーに大きなインパクトを与えました。全体のスケジュールは決まっているものの、学生たちを中心に予定も一部変更されました。（内容等は個人の感想文に出てくると思いますが）このようなフレキシビリティーを持たせたツアーは、準備も含め、今後の運営の参考になると思います。

昨年のツアー帰国後、インドネシアで森林火災が発生し、雨季にもかかわらず二ヵ月も燃え続けました。現地 NGO や村人やボランティアたちが、ほぼ人力で消火に当たりましたが、この大火災の前では無力に近かったでしょう。消火水も尽き、自然鎮火を待つのみでした。この火災は、私たちが滞在した村の近くまで延焼しました。そして一年後、そこは？？？ということで、今回、私はこのツアーで火災現場を訪れることにしました。

昨年は同じ場所が熱帯林でした。今、見渡す限り、雑草の類が一面に。遠くに小さな林が。所々に立ち枯れた木がポツンと。泥炭層からの延焼で根が燃えて倒れた大木が。

この光景を見て、私は 21 年前の阪神淡路大震災の火災跡を思い出しました。目の前で家々が燃えていく。消火水は尽きた。ただ、自然鎮火を待つのみ。水さえあれば、水さえあれば、あそこまでの延焼は防げたのに。家は守れたのに。

村に大きな川から水を引ける消防設備があれば、消防体制があれば、もっとオランウータンの棲める森を守れたのに、皆で植林した森も。ウータングループはこの消火部隊に、支援します。かけがえのない熱帯林の保護ご協力をおねがいします。

昨年と今年、こういった定点観測は継続しなければなりません。数年前に村に発電機が入りました。通電は数時間ですが、今は何処の家にもテレビがあります。夕食後の団らんは TV です。何かバラエティー番組なんかを観ています。昨年は雨季が遅れ遅れで、村の小川には水がありませんでした。今年は子供が浮袋で水遊びしています。川でのマンディ（水浴び）もたっぷりの水で楽々。この度、車の通れる広い道が村の裏玄関まで延びてました。今まで、村の玄関はセコニエル川の小さな港です。車が入ると今後この道を伝って、この村にどんな文化が入って来るのでしょうか？

過去と現在と、外国と日本を見つめてみましょう。世界が見えてきます。

エコツアーから帰って来て、最初のウータンミーティングにツアー参加の学生さんが来てくれました。仲間が増えそうです。

ウータンエコツアーにリピーターを！

エコツアーに参加した6名の若者が、現地で感じたことを率直に書いてくれました。とても新鮮な感覚で、しっかり書いてくれました。以下6名の若者の文章をお読み下さい。

もっとも印象に残ったホームステイ

龍谷大学　社会学部地域福祉学科　大田純菜

私が今回のエコツアーに参加して一番感じたのは自分の知らないことはこの世界にたくさん存在するのだなということです。私が大学で専攻しているのは福祉なのですが環境に関してはほとんど未知という状態で参加させてもらいました。事前に少しインドネシアの文化やパーム油、アブラヤシプランテーションのことについて勉強していったのですが実際見るもの感じるものは驚きや感動の連続でした。

そして、最も印象に残ったことはタンジュンハラパン村でのホームステイです。初めは言葉もわからず日本とは文化も文明も違ってどうしようかととても不安に思ったのですが、村人の優しさや子どもたちの笑顔に触れて不安もすぐに消え去りました。しかし、言葉が通じないということは本当に不便なのだなと感じました。日本では言葉が通じるということは当たり前で通じないということをほとんど経験したことがなかったのですが、インドネシアでは言葉はほとんど通じずもどかしい思いを何度も経験しました。一番悔しかったのはホームステイ先のお母さんとあまり話せなかったことです。お母さんは英語が出来ずインドネシア語で話すことしか出来なかったのですが、私が言っている言葉が分からず何度も苦笑いをされました。もっと日本で勉強しておけば良かったと何度も思いました。 そして、森林火災で焼け野原になった森や国立公園で野生なのか野生じゃないのかよく分からなかった環境問題や村人の労働条件の粗悪さ、オランウータンの悲しい現実等を目の当たりにすることが出来ました。このようになってしまったという現実や消費国である日本がこの問題に深く加担しているという事実にとてもショックと怒りを覚えました。知らない人は知らないままになりそうなこの問題はもっとたくさんの人に知ってもらうところがスタートなのではないかと感じます。私はまだ難しいことは分かりませんが、今回のツアーで感じたことや知ったことは家族や友人に伝えていきたいと思います。

そして、一人一人の意識によって森や自然と共存している村人、オランウータンの未来が変わっていくのではないかと思いました。

インドネシアボルネオエコツアー感想

山田直輝

今回エコツアーに参加し毎日とても新鮮で刺激的な生活を送るなかで、物の見方や考え方、価値観が大きく変わりました。

タンジュンハラパン村での生活

1 日目

村に行き昨年の火災の起こった場所に行き村から近い場所がとてつもない広さで燃えた跡を見て衝撃を受けた。この現状を沢山の方に見て知ってもらいたいと思った。

2 日目

朝から雨が降って待機の時間があったがその時間で現地の小学生や中学生の子と話す事ができ言葉が分からない中で、思いや言葉を伝える難しさを感じた。その後火災についての学習会や防災教育に参加さして頂き皆が真剣に学び学習するのを見て現地での火災に対してのとらえ方、危機感を感じた。そして植林では小学生の子と一緒に植林を行い植え方の工夫などを知れた。そして少しでも自分にできることはあるのではと思った。

3 日目

朝小学校の見学を行った。少し会話も出来る様になった。その後森林火災の起こった場所を見て泥炭土壌の状態を自分の足で感じる事が出来た。特に土から燃え、木の根が墨の状態になっている木を見るのは初めてで火災の怖さを感じた。プランテーション農業では何キロにも渡る油ヤシ農園をみて需要と供給があるから成立している農業ではあるが現地では低賃金で働き自然が失われている事を痛感し何にも出来ない自分がもどかしかった。昼からのオランウ―タン見学は餌付けの賛否はあるとは思うが、僕は観光客の方が沢山訪れボルネオのオランウ―タンや森の現状を知る事ができ、現地の方の収入になるのでこれからも行っていってほしいと思った。だが改善も必要だと思う。

4 日目

朝小学校に行き子供たちと遊びとても仲良くなれた。その後大規模な植林をする為に植林の仕方を学んだ。植林では木が均等の間隔で並ぶように植林をした。植林をする中で今木を植えている最中にも沢山の場所で木が伐採されプランテーション農業が開発されていると思うと何とも言えない気持ちになった。そしてもっと沢山の人に現状を知ってもらいたいと思った。午後からの工芸品づくりでは村の方が作る木彫りを見せてもらい実際に体験さしてもらったがとても細かい作業で難しかった。

私はこのツアーで物のありがたみや人の暖かさ信頼や繋がりをとても感じました。見るもの、聞くこと全てが初めての事ばかりですべてが新鮮でした。その中で色んなことを考える事ができました。そしてこの経験を沢山の方に伝え知ってもらい考えてもらうことが今僕のすべきことだと思います。このツアーを行うに当たり沢山の方の協力があり楽しく真剣に学ぶ事が出来ました。すべての方に感謝しています。今後、沢山の方が現地を見て考える機会が増えることが多くなればと思います。

貴重な体験

大谷絵利佳

本当に貴重な体験ができたエコツアーでした。ウータンの方々を始め、本当に色々お世話になりました。大変ありがとうございました。貴重な体験をできたのも、運営してくださった方々、FNPF、村の人々、休みを取らせてくれた職場の方々など、本当に色んな方々への感謝に尽きます。

大変貴重な体験と思ったことを大きく 5 つに分け列挙していきます。

その 1：ジャングルに行くのが初めてでした。まずボルネオ島に着いて船に乗って思ったのが、ディズニーランドにあるようなジャングルクルーズの世界が本当にあるんだ！っと感動しました。オランウータンや様々な生物が自生する場所がこの先も残って欲しいなと切に思いました。日本の自然河川との違いにも色々目を奪われ、見るもの見るもの全てが新鮮でした。

その 2：ここ 1 年「パーム油のジレンマ」が起きていることは色んな方面から聞いていたのですが、現地のコミュニティーや、現地の生活の様子は行かないと全然分かりませんでした。今回訪れた村の規模でしか分からないのですが、コミュニティーの小ささに驚きました。この先、村が半分に分かれるようなことにはなって欲しくないとすごく感じました。また、問題として聞いていたパーム油が現地の食卓に欠かせないものであるのにも、パーム油がかなり繊細な問題であるのだと分かりました。

その 3：ボルネオ島生活の素敵な面々を知れ、体験できたのも行って本当によかったと思いました。身の回りにある、色んな物を使い生活する。木々になる果物を食べる、現地に自生する草でアクセサリーを作ったり、川で魚を獲り外で木を使い焼いて食べる。みんな手先が器用で、すごく生活力があると感じました。日が昇って起きて、日が沈むから眠る、素直に地球のサイクルに合わせて生きる、素敵な生活と思いました。昔も日本の多くはこうだったんだろうけど、今の日本はすごく不安定な生活だとも気づきました。

その 4：全然インドネシア語ができないのに、受け入れてくれたホームステイ先、また子どもたちとの交流は本当に楽しかったです。色々言葉が通じず迷惑をかけていましたが、将来いつか行くことがあればインドネシア語をしっかり学んでから行きたいです。

その 5：動物植物との共生や、ご近所付き合いなんて言葉を使わなくても、自然とできているボルネオ島の生活は驚きでした。道端ではニワトリが走り回り、アリもセミも家に入って出て行く、猫もどこで飼われているとか関係なく遊びに来る。ご近所さんも同様でしょっちゅう家に入ってくる。日本の多くが縛りを加える方向性だけど、心おおらかにして、ボルネオ島の生活から色んなことが学べるのではないかと思いました。

まず、自分の生活で見直せるところから見直したり、日本から FNPF の支援できることはしたいと思います。

心豊かに暮らす方向を模索できるエコツアーでした。本当にこの機会に恵まれ感謝しています。ありがとうございました。

エコツアーで初めてインドネシアに行ってみて

松波望

今回エコツアーに参加し、焼けた森やアブラヤシ農園を実際に見ることで日本にいるだけでは感じられない貴重な経験や考えが数多くありました。またタンジュンハラパン村での交流ではたくさんの人の温かさに触れました。環境だけでなく子どもたちや人々の笑顔の大切さを感じたこのツアーの中で、改めて取り上げたいことがゴミに関することです。

ジャカルタやパンカランブンを車で移動していると、おそらく家庭から出されたと思われるゴミがうず高く積まれていたり、河原や川の関所にゴミが溜まっている景色を頻繁に見ました。インドネシアではごみ収集のシステムが完全に整っている訳ではないようです。

また村の生活の中で印象的だったのが包装紙などのゴミは道端に放り投げて捨てることでした。ゴミはゴミ箱に捨てるという文化で育った私は非常に衝撃を受けました。その捨て方がインドネシアでの習慣だと思われますが、その習慣が周辺の環境や生活に良くない影響を与えているのではないかと思います。

マングローブ見学に行く途中に見えた川は家庭から出たゴミが浮いているなど、決して綺麗とは言えませんでした。その川で遊んでいたり洗濯をしているお母さんを見ていると、健康に影響はないのかと心配になりました。川が汚れる原因は様々だと思いますが、ゴミによる汚染もその一部ではないでしょうか。現在のゴミはビニル包装紙や電化製品などそのままでは自然に還れないものが増えています。それが回収されず長期間放置されること土壌や河川の汚染に繋がっていると考えられます。

今まで通りの習慣ではゴミの変化により環境汚染が進む上、健康被害の心配があります。工場からの廃棄物や排水により汚染される環境だけでなく、普段通りの生活により徐々に汚染されてしまう環境も自分の目で見ることができました。今ある環境を守るため、現地の人たちのあの温かい笑顔を守るためにはどうしたらいいのか、多くを考えられるようになったツアーでもあったと思います。

インドネシアの一週間

松下 遼真

８月２６日から一週間、私はインドネシアにいってきました。そこでは普段日本では味わえない経験や、出会い、またたくさんの知識を得ることができました。

ホームステイをしたタンジュンハラパン村の家についたとき驚いたことは、家の中の家具の少なさです。リビングにはテレビとテレビ台しかなく部屋にもタンスが一つあるだけでした。子どもたちと植林活動をしているとき一人の男の子が長いツルをみつけました。そこから多くの子供が必死にツルを抜いているのを見て私は「昔みんなで根っこぬいて遊んだな」と思いました。しかし村の子供たちは、そのツルで綱引きを始め、ちぎれたらそれで大縄跳びを、またちぎれたら縄跳びをとツル一つで様々な遊びをし始めました。そのとき私はこの村の子供たちの発想力に驚きました。また家族でテレビを見ているとき、ドラマが始まるとほかの家族がやってきて一緒に見始めました。そのドラマが戦闘シーンになり勝利すると一斉に拍手が起こりました。日本でテレビを見ていてそんなに感情移入することはないし、みんなで拍手をすることなど多分ないでしょう。そのときこの村の人の素直さにまた驚きました。他にも子供の無邪気さなどを見て私は一つのことを思いました。それは日本は物があふれすぎているということです。物があふれているせいで暇な時間というものはなくなり、家族間の対話する時間も減っています。家族みんなでドラマを見るなど私はしたことがないかもしれません。またいまでは公園で遊ぶ人も減り、子供たちはゲームをして遊んでいます。このことが悪いとは言いませんが、インドネシアの子供たちの方が楽しそうに遊んでいたように感じます。洗濯などでも、ホームステイ先のお母さんが、川で私の服を洗ってくれたとき、最初はくさいのかと思いましたが、実際は太陽の臭いがしてむしろいい匂いがしました。日本では、洗濯機が主流になりどこの家庭にもあります。そこから柔軟剤のようなものができ、今ではみんないい匂いをさせるために高い柔軟剤を買っています。私がインドネシアで学んだことは、日本では物があふれて、どんどんそれらは洗練されてきています。私たちはそれを使いこなそうとするあまり、物につかわれているのではないかと思いました。

2016 年 9 月

クラウドファンディングのご報告

昨年のボルネオ島大規模森林火災を受け、初期消火を目指したパトロール等に取り組もうと FNPF(Friends of the National Parks Foundation)をはじめとする現地の人々が消防チーム結成に向けて動いています。ウータンでは、消防パトロール用の資材を購入し、必要経費（メンバーの食費、ボートやバイクの燃料費等）の一部を支援したいと、初めてクラウドファンディングに挑戦することにしました。

クラウドファンディングとは、不特定多数の人が通常インターネット経由で他の人々や組織に財源の提供や協力などを行うことを指す、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語です。いくつかのクラウドファンディングサービスがありますが、今回は「CAMPFIRE」を使い 6/14～7/20 の期間に募集しました。

【結果】

・クラウドファンディングによる支援額：447,099 円

・クラウドファンディングを介さない直接入金：10 万円

【以下のようなお礼の品をお送りしました】

・ロセラティー（写真左）:［3,000 円以上：30 名］

・ロセラティー＋あなたの苗（植樹写真）:［5,000 円以上：45 名］

・上記 ＋ 村人手作り工芸品（写真右）:［10,000 円以上：20 名］

ロセラティーとは一般にハイビスカスティーと呼ばれている赤い花を乾燥させた酸味のあるハーブティーです。村人が栽培に携わり、村の女性の手編みの籠とともに買い上げて、村人の収入を生み出せるように取り組んでいます。

ご協力下さった皆様、本当にありがとうございました！今回の支援金から早速、「ドローン」の購入費の一部を出して、届けました。効率的なパトロールに役立てられるはずです。また今,「トランシーバー」を現地購入しようと試みています。

現地は乾季に入りましたが、幸いまだ火災は起こっていません。しかし気候変動を踏まえると、昨年の様な状況はまた起こると考えられます。今のうちに現地の体制を整え、必要な資材を充実させられる様に引き続き行動を続けます!

アブラヤシ企業は消費者の力で変わる（その2）

神前進一

現在，世界中で最も多く消費される植物油であるパーム油は生産の拡大を続けている。しかしその生産過程で，森林破壊，とくに泥炭地や保護価値の高い森林の破壊，ひいては大量の温室効果ガスを排出し，絶滅危惧種の生息域を破壊し，また地域住民とくに先住民の慣習的土地権との紛争を引き起こし，労働者の人権侵害や搾取なども数多く報告されている。このため，欧米の環境 NGO や消費者により反パーム油キャンペーンが展開されてきた。一方，生産国の経済や生産者農民の収入源としての重要性はきわめて高く，さらなる生産拡大が目指されている。

パーム油を避けることは賢明な判断ではない

私たちの身の回りの数多くの商品にはパーム油が使用されているので，パーム油の消費を避けて通ることはできない。実際，日本でも一人当たり年間 4kg 以上を気づかないうちに消費している。それでは，アブラヤシ生産が引き起こす多くの問題点ゆえに，私たち消費者はパーム油をボイコットすべきだろうか。しかしこれは，賢明な選択ではない。なぜなら，パーム油を拒否しても他の植物油を消費することになるからである。パーム油に次ぐ大豆油は，ブラジルなど世界各地で森林破壊を引き起こしている。パーム油を大豆油，ナタネ油と比較すると，単位面積当たりの生産量が，大豆油の 10 倍，ナタネ油の 4.5 倍である一方，1 トンの油の生産における肥料や農薬の使用量，エネルギー投入量は格段に小さい（表 1）。これ以上の森林破壊をすることなく，限られた農地で増え続ける油需要を賄うには，アブラヤシが最も効率的なのである。

表 1　主要植物油の生産における環境負荷

	アブラヤシ	大豆	ナタネ
1ha当たり油生産量（トン）	3.62	0.3	0.79
油 1 トン当たりの化学肥料使用量（kg）	47	315	99
油 1 トン当たりの農薬使用量（kg）	2	29	11
油 1 トン当たりのエネルギー投入量（Gj）	0.5	2.9	0.7

出典：http://www.palmoilinvestigations.org/is-boycott-the-answer.html

RSPO の取り組み

上述のようなマイナス面を排し，持続可能なアブラヤシ栽培に転換するための取り組みが展開されてきた。2004 年に WWF が中心となり，世界的なサプライチェーンと協力して，アブラヤシ産業を持続可能な方向に変えるために結成した任意組織 RSPO（持続可能なパーム油のための円卓会議）は先駆的で最も成功した取り組みと言える。生産者，搾油・流通業者，消費財製造業者，小売業者，金融機関，環境 NGO，社会・開発 NGO の 7 部門のステークホルダーが参加し，持続可能なパーム油の全サプライチェーンにわたる信頼できる世界基準の策定してきた。生産国から消費国まで全世界で 2016 年 9 月時点で会員数は 3045，日本からもサラヤ，花王など油脂・洗剤メーカーを中心に 47 社が参加しており，持続可能なパーム油の認証を受けた栽培面積は 290 万 ha，認証油の流通量は 1137 万トン（世界の 17%）に達しており，ヨーロッパでは流通量の約 50%を占めるという。

RSPO は持続可能なパーム油のための原則と基準（P&C）として 8 原則，43 基準を定めている。特に原則 7 では新規農地の責任ある開発として，事前の参加型社会・環境影響評価，原生林や保護価値の高い（HCV）森林の開発禁止，事前に十分な情報を与えられた上での自由意志に基づく合意（FPIC），新規農園の整備に火を使用してはいけないことなどが定められているが，泥炭地については広範囲の作

付を避けるという緩やかな表現となっている。P&C に違反した企業に対する苦情を受理するパネルが設置されており，前回述べたように 2016 年 3 月末に IOI 社への認証停止の制裁措置が科されたが，8 月初旬には提出された改善計画が評価されて制裁は解除され，早すぎる制裁解除に批判も出ている。

RSPO を超える企業の動き

こうした中で，アブラヤシ関連企業の中から新たな動きが生まれ始めた。ネスレは KitKat に使用されているパーム油に対するグリーンピースの反対キャンペーンを受けて，2010 年 5 月に世界初の森林破壊をしない責任ある調達ガイドラインを発表した。同年 12 月には Consumer Goods Forum が森林破壊ゼロ公約を行った。2011 年 2 月にはインドネシア最大のアブラヤシ生産企業の Goldemn Agri Resource 社が，ネスレの森林破壊ゼロの条件を満たす森林保全政策を発表した。これを機に，他の巨大企業もこぞって RSPO の緩やかな基準を上回る政策を発表し，2013 年 12 月には世界最大のパーム油企業 Wilmar International 社が「森林破壊，搾取，泥炭地破壊ゼロ」（NDEP）政策を公表し，世界中の供給元への履行を求めた。

インドネシアパーム油誓約（IPOP）の解散

2014 年 9 月には国連気候変動会議を機に，インドネシアの 4 大アブラヤシ企業（のち 6 社に）がインドネシアパーム油誓約（IPOP）を結成し，巨大プランテーシ企業主導で RSPO の基準を大きく上回る，泥炭地での新規開発禁止，農薬パラコートの即時使用中止などを定めた。しかし IPOP に対し，インドネシア政府は 2016 年 7 月にカルテルに当たるとして組織解散を命じ，2 年足らずでこの動きは消滅し，今後は政府主導の緩やかな基準の認証制度 ISPO へと統合されることになった。この背景には，欧米の消費者をターゲットに自ら高い環境的・社会的持続可能性を求める巨大企業と，こうした高い基準に対応できない小農をはじめとする多数の生産者の乖離が存在する。実際，インドネシアでのパーム油生産の約 40%はさまざまなタイプの小農が担っており，この問題は，2016 年 5 月にマレーシア最大のアブラヤシ・パーム企業 FELDA Global Ventures（FGV）が RSPO の認証を自発的に取り下げたことと軌を一にする。FGV は政府系機関である連邦土地開発庁にルーツを持ち，現在も 10 万人余りの入植者つまり小農が栽培するパーム油が 30%を占め，これら小農による P&C 違反が各地から苦情パネルに届き，IOI 社の認証停止の二の舞になることを事前に避けたものと考えられている。

アブラヤシ企業採点表

こうした状況が展開する中，国際 NGO やシンクタンクは，パーム油関連企業の森林保全や持続可能性の程度を採点して公表し，消費者の力で企業を変えようとしている。以下，その例を紹介する。

FoE と関連する米国の Union of Concerned Scientists は持続可能なパーム油について，食品，パーソナルケア，ファーストフード，小売業（ストア・ブランド）の 4 業種のトップ各 10 社を対象に，森林破壊ゼロ，泥炭地破壊ゼ

UCSによる企業採点表（2015，2014年）

食品

Company	Example Brands	Score 2015	Score 2014
Nestlé	Toll House, Gerber	90.5	85.5
DANONE	Danimals	89.2	51.5
Kellogg's	Pop-Tarts, Nutri-Grain	88.5	52.8
ConAgra Foods	Act II Popcorn, Marie Callender's	84.1	35.5
Unilever	Ben and Jerry's, Popsicle, Slimfast	83.4	83.5
PEPSICO	Quaker, Frito-Lay	80.7	33.7
GENERAL MILLS	Pillsbury, Nature Valley	77.8	42.6
Heinz	Ore-Ida, Smart Ones	42.9	37.1
Mondelēz International	Oreo, Ritz, Nutter Butter	36.8	68.6
Kraft	Cool Whip, JELL-O	10	0

パーソナルケア製品

Company	Example Brands	Score 2015	Score 2014
COLGATE-PALMOLIVE COMPANY	Softsoap, Irish Spring	88	35
Henkel	Dial, Right Guard	86.3	40
P&G	Cover Girl, Old Spice	84.2	16.1
L'ORÉAL	The Body Shop, Kiehl's, Lancôme	80	80
Reckitt Benckiser	Veet, Clearasil	72.3	68.3
KAO	Jergens, Curél	54.8	34
Beiersdorf	Nivea, Aquaphor	51.3	37.5
ESTÉE LAUDER COMPANIES	Clinique, Bumble and bumble	28.3	0
AVON	-	20	15
THE CLOROX COMPANY	Burt's Bees	0	0

To download detailed information on each company's score, including the documents we examined to calculate it, visit www.ucsusa.org/palmoilscorecard

Strong Commitment　Some Commitment　Little Commitment　No Commitment

出典: Union of Concerned Scientists(2015): *Fries, Face Wash, Forests: Scoring America's 75 Top Brand on Their Palm Oil Commitments.*

ロ，トレーサビリティ，透明性，パーム油調達先企業の 5 項目 20 点ずつ 100 点満点で採点したもので，2014 年版と 2015 年版が発表されている。食品部門では 2 年連続でネスレが約 90 点で首位を占め，パーソナルケア商品では日本企業として唯一花王が 6 位に評価されている。注目すべきはこの 1 年間の進歩で，森林破壊ゼロが 6 社から 14 社へ，泥炭地破壊ゼロが 3 社から 12 社へ（いずれも 2014 年は 30 社，2015 年は 40 社中），トレーサビリティと透明性に関しても大幅な向上が見られる。

グリーンピースは世界の 14 の消費財製造企業について森林破壊ゼロ政策の実行度をサプライチェーン全体にわたって採点している。責任ある原料調達，透明性，産業界の改革支持の 3 項目について，達成，目標に近づきつつある，公約が果たされていない，の 3 段階で評価し，それらを総合評価している。総合評価では森林破壊ゼロ公約が達成された企業としてネスレ，フェレーロ，達成途上の企業としてダノン，ゼネラルミルズ，イケア，ケロッグ，マーズ，モンデリーズ，オルクラ，P&G，ユニリーバ，公約が果たされていない企業としてコルゲート，ジョンソン＆ジョンソン，ペプシが挙げられている。WWF は RSPO に報告された各種データを用いて，認証された農園面積比率などを点数化し，アブラヤシ生産企業を 7 点満点で採点している。これによると 92 社中 Sime Darby 社など 14 社が 7 点満点と評価されている。RSPO に年次進歩報告書を提出した企業は 92 社中の 64 社，農園範囲の詳細を開示した企業は 54 社，認証農園を持つ企業が 32 社などとなっている。パーム油生産企業を公開された情報をもとに 50 以上の指標で採点した SPOTT（Sustainable Palm Oil Transparency Toolkit）がある。パーム油生産企業の透明性を総合的に判定し，バイヤーや金融部門の利用を想定しており，コンセッションの詳細な地図も見ることができる。指標は RSPO への報告，コンセッションの地図，環境管理，泥炭地，火を使わない，温室効果ガスの排出，トレーサビリティの 7 項目である。総合判定結果でスコア 66%以上が，DAABON Group の 96.4%を筆頭に 7 社，33～66%が 18 社で IOI 社は 37.3%で中位，33%以下は 25 社で，情報開示ゼロで RSPO から追放された Darmex Group 社の 0%まで，生産企業間の格差は限りなく大きいことがわかる。消費者の行動を変えるパーム油採点表　ただしこれらの生産企業についての採点表は，私たち消費者がたとえその結果を知っても，それをもとに消費行動を変え，企業を持続可能なパーム油産業へと導くツールとはなりえない。そこで消費者が最終製品を購入する際の選択の助けとなる評価の例を探してみた。

グリーンピースによるパーム油の森林破壊ゼロ採点表（2015）

出典：Greenpeace (2015) *Cutting Deforestation of the Palm Oil Supply Chain: Company Scorecard.*

消費者の行動を変えるパーム油採点表

イギリスの消費者組織 Ethical Consumer はパーム油に特化したビスケット，アイスクリーム，バター，スプレッドの商品採点結果を公表している。認証済みパーム油の使用比率，ゼロ森林破壊，ゼロ泥炭地だけでなく，人権，気候変動，生息地と資源などの情報をサプライチェーン全体について，ホームページ，RSPO への報告，企業へのアンケートにより収集して 20 点満点で採点している。ビスケット

についての結果を見ると，20 点満点で 16.5 点から 0.5 点まで，製品間で大きな格差が明らかになっている。

米国の消費者へのパーム油の情報提供に特化した団体 Palm Oil Investigations は， 15 万点にのぼる商品のバーコードをスキャンすることで，その商品に含まれるパーム油の持続可能性を即座に知ることのできるスマホ，アンドロイド用のフリーアプリ POI（Palm Oil Investigations）を開発して提供している。表示される結果は，パーム油を含まない（POF），積極的森林破壊ゼロ政策（NDP）すなわちプランテーションから最終消費者までのサプライチェーン全体にわたるトレーサビリティ，RSPO 認証の持続可能なパーム油（CSPO）すなわち 95%以上が分別された RSPO 認証パーム油，RSPO のマスバランス（MB）すなわち RSPO 認証油が混合されている，FAIL すなわち非認証油のみあるいは 5～95%が非認証油もしくは成分に関する情報問い合わせに回答がなかったものという 5 区分で表示される。

Ethical Consumerによるパーム油商品の採点結果（ビスケット）

Score table　More Detail

Brand	Rating out of 20
Against the Grain biscuits [A,O]	16.5
Island Bakery Biscuits [O]	16
Biona biscuits [O]	14.5
Traidcraft biscuits [F]	13
Doves Farm biscuits [O, A]	12.5
Bahlsen biscuits	12
Naim's biscuits [A]	12
Walkers Shortbread	12
Hill biscuits	11
Mrs. Crimbles biscuits	11
Crawford's biscuits	9.5
McVitie's biscuits	9.5
Duchy Originals biscuits [O]	7
Fox's biscuits	7
Marks and Spencer biscuits [F]	6
Co-op biscuits	5.5
Marks and Spencer biscuits	5
Sainsbury's biscuits [F]	4.5
Sainsbury's biscuits [O]	4.5
Waitrose biscuits	4.5
Sainsbury's biscuits	3.5
Tesco biscuits [F]	3.5
Tesco biscuits [O]	3.5
Jammie Dodgers biscuits	2.5
Lyons biscuits	2.5
Maryland Cookies	2.5
Tesco biscuits	2.5
Viscount biscuits	2.5
Oreo cookies	2
ASDA Biscuits [F]	1.5
Asda biscuits [O]	1.5
Morrisons biscuits	1.5
Asda biscuits	0.5
Cadbury's chocolate biscuits	0.5

出典：http://www.ethicalconsumer.org/buyersguides/food/biscuits.aspx#palm_oil_scores

RSPO の認証にはさまざまな問題点が指摘されているが，その一つがマスバランスという認証油と非認証油を混合したものにも MIXED という表示を入れて認証ロゴが使用できることである。RSPO 認証は搾油所単位で与えられるので，同じプランテーション企業でも農園によって認証油と非認証油が混合されることがあり，最終製品製造企業にとって農園レベルまでさかのぼるトレーサビリティを確保することは実際問題困難なのである。

日本の消費者にとって，パーム油が含まれる商品の選択をしようとしても，手掛かりとなる情報が全くないのが現状である。今年 3 月には初めて，パーム油のグリーン購入研究会が持続可能なパーム油のガイダンスを発表したが，製品のバーコードにかざすだけで，パーム油使用の有無，使用されているパーム油の質が一目でわかるようなツールが一日も早く開発されることを願ってやまない。

2 種類の RSPO 認証パーム油のロゴ

Palm Oil Investigations の表示結果

出典：http://www.palmoilinvestigations.org/poi-scanner-app.html

パーム油学習会第5弾「アブラヤシ企業は変わるか？」の報告

アブラヤシの実

７月９日（土）ケイゾクエナジーにてパーム油学習会をおこないました。はじめに武田さんから、ウータン・森と生活を考える会や、ボルネオ島の中カリマンタンの現地のＮＧＯであるＦＮＰＦなどの活動の紹介があり、つづいて、神前さんから、「アブラヤシ企業は変わるか」というテーマで、最近のＲＳＰＯ（持続可能なパーム油のための円卓会議）の動きを、お話いただきました。そのお話の内容は、本誌１２１号と本号の２回に分けて掲載しておりますので、ここでは、省略いたします。多くのかたがたに参加していただきいくつもの質問もいただきましたので、質問の内容と、それに対する神前さんなどの回答をまとめさせていただきます。

主な質問として、花王やネスレなどの大きな企業がＲＳＰＯでは積極的な企業として名前がでてくるのになぜ他の企業はそれほどでもないのかと言う問題で、それは、グローバル企業になると、マーケットが世界を相手にしているので、世界基準に合わせないといけなくなること、グリンピースなどのＮＧＯの取り組みも、大きかったのではないかということ、さらに、「認証制度」が大企業に有利になってしまうシステムになっているということもあるのではないかなどの意見も出されました。また、ＲＳＰＯに積極的な企業としては、洗剤メーカーのサラヤがＲＳＰＯに参加してから、他の洗剤メーカーなども参加するようになったということも紹介されました。

また、認証制度がうまく機能するには消費者の関心の高まりも必要だが、日本の消費者の場合、持続可能なパーム油かどうかということに関心を持つ以前に、情報が与えられていないのではないか、との意見も出ました。

また、「日本の商品では、『植物油脂』と書かれていて、パーム油が入っているかわからないのですが、その表示の改善はできないでしょうか。」と言う質問には、石崎さんなどから、「海外では、表示されているのが普通のようです。日本では、電話で消費者庁に問い合わせたところ、前からの法律を引き継いでいるということと、油の割合というのは結構変わるので、割合が変わると表示も変えなければならないので、現実的にはむずかしいのではないかという答でした。しかし、そういう声が数多く来れば、考えるようになるのではないかと思います。」とのこたえがありました。

さらに、「ＩＯＩが認証から外れ、フェルダ（マレーシア政府系の世界最大のパーム油事業会社）が認証を取り下げたので、マレーシアのパーム油の大半が認証外になってしまうので、ＲＳＰＯの仕組み自体がゆらぐおそれはありませんか。」という質問には、神前さんが「7 月 1 日にインドネシアの先駆的大企業によるインドネシアパーム油誓約がインドネシア政府の圧力で解散を余儀なくされました。巨大企業と小農に同じ基準を科すことの難しさから、インドネシアとマレーシア両国ともＲＳＰＯよりも緩やかな認証制度へ移行しようする動きがあり、小農の問題がＲＳＰＯの存在を揺るがしかねない状況です。」とのこたえがありました。

そして、「パーム油の場合、認証というのはどの程度進んでいるのでしょうか。」との質問には、「今の認証というのは、ほとんどがミックスですから、全然進んでいません。ただし、2020 年を目標にしている１００％農園までトレサビリティー可能なようにしていこうと宣言している企業が多いので、あと３、４年で大きく変わることを期待しています。」との答がありました。（以上、文責米澤）

World Forest News　世界の森林ニュース

2016 年 6 月～8 月　　by S.Kohsaki

【マレーシア・サバ州で熱帯で最も高い樹木発見】

マレーシア・サバ州の Tawau Hill 国立公園内で学術調査チームが高さ 89.5m の絶滅危惧種に指定されている黄メランティ(フタバガキ科)の樹木を発見し，熱帯で最も高い木と認定。[Mongabay　6 月 12 日]

【ミシュラン社がゴム調達で初のゼロ森林破壊方針】

ミシュラン社はタイヤ用ゴムの調達で，西アフリカや東南アジアでのゴム・プランテーションによる森林破壊をゼロにする政策を発表。[Mongabay　6 月 13 日]

【アブラヤシ大企業による森林破壊ゼロの協定破棄】

インドネシア巨大アブラヤシ企業 6 社による森林破壊ゼロなどを掲げた「インドネシアパーム油公約(IPOP)」はカルテルに当たるとしてインドネシア政府がこの協定の破棄を求めた。この結果，発足 2 年足らずでこの組織は解散し，今後は政府の主導する持続可能パーム油認証(ISPO)に一本化される。[Mongabay　7 月 1 日]

【イギリスがカメルーン産違法木材輸入に制裁措置】

イギリス政府は急速に熱帯雨林が失われつつあるカメルーンから違法木材を輸入した 14 社に対し，EU 木材規則(EUTR)に反したとして是正措置など制裁措置を科した。[Mongabay　7 月 1 日]

【ボルネオ・オランウータンが絶滅危惧種に指定】

国際自然保護連合(IUCN)は 2008 年指定のスマトラ・オランウータン同様，ボルネオ・オランウータンを生息地の破壊，劣化，分断で野生での絶滅のリスクが極めて高い Critically Endangered Species(CR，絶滅危惧ⅠA 類;近絶滅種)に指定。[Mongabay　7 月 5 日]

【インドネシアのアブラヤシ開発は今後5年間凍結】

インドネシア政府は大統領指令としてアブラヤシの新規開発許可を今後 5 年間凍結すると発表。約 85 万 ha の植栽許可が凍結され，さらに 60 万haの開発予定地の許可が取り消され，既存のプランテーションでの生産性の向上と改植が奨励される。[Mongabay　7 月 18 日]

【スリランカが世界初の全てのマングローブ林保護】

スリランカはインド洋津波の経験をもとに，マングローブ林の約半分を保護区域に指定，さらに全てのマングローブ林を法律で保護し，回復する5ヶ年計画を昨年から推進中で，その一環としてマングローブ博物館がオープン。[Mongabay　7 月 26 日]

【サラワク州がオランウータン生息地を保護区域に】

マレーシア・サラワク州政府は昨年，オランウータン戦略行動計画を策定し，バタンアイ国立公園の拡大を含め，全てのオランウータン生息地を保護区域(TPA)の指定し，原生林と保護区域ではアブラヤシ栽培許可を発行しないことを明言。[Borneo Post 7 月 29 日]

【ミャンマーが来年 3 月までの全面伐採禁止】

報道が錯綜していたミャンマーの全面伐採禁止は，2017 年 3 月末までの伐採禁止措置が法制化され直ちに施行。その後については未定だが，森林破壊を止め木材産業を正常化する第一歩と期待される。[Mongabay　8 月 3 日]

【RSPO が IOI 社への制裁を解除】

今年 4 月に科された RSPO の持続可能なパーム油認証停止の制裁措置は，IOI社が行動計画を提出し改善が見込めるとして 4 ヵ月余りで解除された。環境NGOからは早すぎる制裁解除に批判が高まっているが，調達を中止した企業の動きは未定。[Mongabay 8 月 5 日]

【サラワク州が国立公園・野生生物局を新設】

マレーシア・サラワク州政府は 2017 年 1 月より森林局から国立公園・野生生物局を独立させると発表。31 ヵ所 45 万 ha 余りの自然保護区(TPA)を新設する計画中で合計 130 万 ha(州面積の 10.5%)の自然保護区設立をめざす。[The Malay Mail　8 月 10 日]

【インドネシアがオランウータン保護計画を改定】

インドネシア政府は 2007 年策定のオランウータン保護行動計画を見直し，オランウータンなど 25 の優先種を年率 2%で増加させる意欲的な計画を検討しているが，年率 2.5%で減少が続く現状から，実現は不可能との声も。[Mongabay　8 月 11 日]

【ペルーから米へ輸出された木材の 90%が違法材】

アマゾン上流域に位置するペルーから米国に昨年 1 月に輸出された木材の 90%が違法材であることが，ペルー機関の検証に基づく米政府報告書で判明。米国は 2008 年の改正レイシー法で違法材の取引や輸入禁止を定めたが，その後も大量のペルー産違法材を積んだ貨物船が相次いで発見されている。[Mongabay　8 月 18 日]

【インドネシアで森林火災に関し 454 人を逮捕】

インドネシア当局は昨年の森林火災・煙霧を繰り返さないよう監視と取り締まりを強化しており，スマトラとカリマンタンで広がりつつある森林火災で今年すでに 454 人を逮捕した。[Mongabay　8 月 26 日]

新コーナー　ウータン会員のページ

ウータン・森と生活を考える会の会員には、いろいろなことで活躍されているかたがたくさんおられます。できるだけ新しく会員になられたかたに、自己紹介・入会の動機・期待・提案などを自由に書いていただくことにより、会員相互の交流を深め、今後の運営にも生かしていきたいと思います。書いてみたいというかたは、ウータン・森と生活を考える会にメールなどでご連絡下さい。（米澤）

藤原恒夫さん

今年の 3 月 29 日午後 7 時 30 分、私は事務局のドアをノックした。うん、なんじゃココは？？？雑然とした狭い部屋に、大きなテーブルが一つ、囲むようにパイプ椅子。ウータン勉強会で見たことのある顔が。挨拶をしつつ周りの様子を観察した。数百の封筒に冊子、名簿、切手。この日は年4回のウータン会報誌の発送日であった。忙しい作業を手伝い？ながら、活動の中にはこういったことも大切と思った。すると、遅れて、一人二人とメンバーが集まって来た。皆んな仕事を抱えてやっているんだ。作業をする中、誰からか話が出て、ミーティングのような流れになった。手は休めない、時間がもったいないのだ。ただ、私は分からない言葉、固有名詞がいっぱい出てきて、内容が断片的にしか頭に入ってこない。結論が出たのか、出なかったのか？そして作業が、話しが一段落したところで、一人また一人と帰って行った。家も遠いし、明日も仕事。私は、帰るタイミングを失っていた。これが、私の初日であった。

それから半年、活動日は欠かさず出席したが、この間ミーティングは基本的に変わっていないように思える。それぞれ仕事をもっているし、疲れた状態での参加もあるし、しかも完全なボランティア。いつもフルメンバーということは難しい。遅刻では議論も中途半端になるし、早退では議事録はあるものの、やはり中途半端は否めない。これでは、情報の共有も中途半端になる。共通認識がなければ、活動はスムーズに行われない。

そこで提案。ミーティングの前々日には、メンバーにメールが入るが、議題が入っていたり、なかったり。このへんをハッキリさせたい。遅くとも4，5日前に、議題を重要順に書いて、資料があったら必ず添付してメールする。メンバーはアウトプットするか、頭にインプッして出席する。当日、資料をもらっても、理解不足が起こり、その時間内で議論を深めることは困難であると思う。また、ミーティングの進め方にも工夫が必要だ。ウータンは非常にフラットな組織であるため、いつでも誰でも、様々な意見を自由に述べることが出来る。ゆえに、収拾がつかなくなったりすることも有る。やはり、会議にはコンダクターが必要だ。自由でフレキシビリティーなウータンの良さが、少し犠牲になるかも知れないが、限られた時間では仕方がない。懇親会的なものは、別の機会を設ければ良いと思う。

Gyro さん　ウータン・森と生活を考える会の活動への感想

いろいろな団体と比べても、ユニークで魅力的だ。元々、オランウータンを守る生物保護の団体だと思っていた。しかし、オランウータンを守る活動はその象徴で、オランウータンを取り巻く森林を守る活動が主体である。団体の規模が大きくないにも関わらず、森林を守る為に必要なことは垣根なく考え、行動してしまうところが凄い。個人的な感想だが、活動範囲が広い為、リソース面での不足はある。しかし、前のめりでもできるところから実現するところが他の団体と異なる魅力だ。

プランテーション農園が広がる理由と消費する日本に棲む我々がどう関係しているのか！巨大森林火災に対する現地ニーズを聞き！生活者目線で小回り良く支援している。また、日本の環境団体としては珍しく？現地 NGO メンバーとの関係が素晴らしいと思う。これはスタッフのパーソナリティに依存するようにも思うが、極めて対等でダイレクトである。(詳細は過去の会報や WEB サイトから知ることができる。)30 年の活動の信頼性もあるのだろうが、「″支援金″もそうだが″家族/友達″としてのサポートがありがたい」と現地からの声を聞けるだけでも良い活動をしていると思う。

今後とも国際的な課題や海外 NGO 等との関係を直接感じる機会を提供いただきたいと思う。

会計より　　ありがとうございました！

井下祥子

会費をいただいた方（ 2016.6.29～2016.9.20）（敬称略）

インドネシア火災支援カンパをいただいた方（敬称略）

（この他クラウドファンディング（振込以外）でご支援頂いた方も多数おられます）

引き続き「インドネシア火災寄付」募集中です。温暖化を防ぎ、様々な資源を私たちに届けてくれる貴重な森を守るため、力をお貸しいただければ幸いです。

支援カンパは現地に渡したジェットシューター（水をためた背負式のバッグから、ハンドポンプで勢いよく水をかけて消火する道具）などの費用と、消防ホースの送料など、国内で見込まれる経費を残して、全額現地ＮＧＯに送金する予定です。正確な報告は次号にて

（会費を頂いた方も含め、すべての方に振込用紙を同封しております。ご了承ください）

振込先：ゆうちょ銀行　００９３０-４-３８８０　ウータン・モリトセイカツヲカンガエルカイ
※「インドネシア火災寄付」と用紙に記載してください。

✉　**＜おたよりから＞＊当団体（RFJ）も、昨年から「自然発火防止事業」を（先住民の）カヤポ族エリアで開始しました。深刻ですね。　　熱帯林保護団体**

振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。領収書がご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。（メッセージも掲載させていただくこともございます。掲載不可の場合はお書き添えください）

スケジュール

１０月１６日（日）インドネシア現地報告会　午後 1:30～4:30
場所：弁天町市民学習センター　和室（06-6577-1410）
報告者：石崎・藤原・神前・エコツアー参加者など　　参加費：５００円

１２月１０日（土）パーム油学習会第６弾　「アブラヤシ栽培における小農の役割と課題」
午後 1:30～4:30　　**場所：大阪聖パウロ教会１階**（大阪市北区茶屋町 2-30 Tel: 06-6371-0170）
講師：神前進一（元阪大教官）・笠原英俊　　参加費：５００円

※申し込み・問い合わせは、石崎（info@hutangroup.org 090-8145-1146）まで